南口　誠

# 指導的技術者になれって言われても…

『理系のトップはなぜダメなのか』
諒純也著／阪急コミュニケーションズ

本学が行っている教育の方向性の１つに「指導的技術者の育成」というのがある。一般的に解釈すれば、技術者としてリーダーシップが執れることが重要な要素という感じだろう。本学の出身者である私にとっては、学生の頃から、「リーダーとか向いてないしね」と思っていた話である。その気持ちはあまり変わっていないのが正直なところである。

さて、リーダーシップはなかなか教えて身に付くものでもないと思う一方、リーダーシップ教育の重要性や必要性は大学教員として強く感じている。ビジネスではリーダーシップの育成というのはもはや常識になっていて、企業の研修やビジネススクールでは普通に行われている。それらは、一定の成果も上げているように見える。

先に記したように、指導的技術者を育成する本学では、様々な教育プログラムでリーダーシップの育成を進めている。うまくいっているかどうかは別に、足下を見てみたくなった。というのも、他大学のある年配の工学部教授から興味深いことを伺った。「まじめに勉強していて成績が良かった学生で出世したのは大学の先生になったものだけで、学生時代に先生から怒られ、まじめに研究なんかしなかったタイプが会社では偉くなっている。同級生でもそうだな」とよく聞く話であるが、ここにリーダーシップを考える上で何かあるのではないかと思った。

今回、紹介するのは、そんなことを考えている頃、見つけた本である。「理系のトップはなぜダメなのか」とタイトルだけを見ると何とも言えない本だが、中身は非常に示唆に富んでいる。この本の著者は理系出身であり、某大手材料メーカーで15年ほど技術者生活を送った後、自ら開発した商品とともに営業部に移動したそうである。現在は新規事業の立ち上げの責任者を務めているそうである。ご自身も理系上がりのトップである。そういう立場で、理系出身者が陥りがちなリーダーとしての失敗を述べている。その上で、理系出身者としてリーダーシップを執れるようになるための教育に関する処方箋を提言している。

この本に書かれている内容は、自分自身に照らし合わせれば何とも辛い内容であり、知り合いの顔を思い浮かべれば非常に愉快である。最近のお笑い風に言えば、理系出身トップの「あるあるネタ」である。もっとも笑っていられる話ではない

のであるが...

私たち教員にとってはいかに指導的技術者を育成すべきかという観点で読んで欲しい本であるが、修士や博士の学生にも是非とも読んで欲しいと思う。というのは、この本を読んで私自身自覚していなかったことが幾つも発見できたのである。技術者としてリーダーシップを発揮する場面において、必ずしも部下やパートナーは同じ理系とは限らない。財務担当者、デザイナー、一般市民など、私たち理系の常識を知らず、私たちがキチンと説明しようとすればするほど、私たちの話を聞きたくなくなる方たちである。それでも、チームで仕事をしていかなくちゃならないし、チームを纏めていかなくちゃならない。投げたり、キレたりしても、何も始まらないし、何も解決できない。チームが大きくなって個々の顔が見えないレベルのポジションになれば、相手の反応もわからずに話をするのである。指導的技術者には何が必要かを考えるためにも学生にぜひ読んで欲しいのである。

もちろん理系出身者の全てがリーダーに向いていないわけでない。理系出身の優れたビジネスリーダーは日本にも多く存在する。文系出身者の方がもっと問題だという意見もあるだろう。しかし、そう言ってみても何も得ることはない。本学の社会的役割が、技術者として優れた能力を身につけ、リーダーとして高い能力を発揮する人間を「より多く」輩出することとするなら、特別な人だけを取り上げて賞賛しても仕方がない。そういった優れた指導的技術者が持つコンピテンシーを把握して、それをいかに育てる教育を行うかが重要なのである。そういう観点で読んで欲しい本である。

## 執筆者紹介

**南口　　誠**

機械創造工学専攻准教授。専門領域は、材料工学、高温物理化学。

**『書名』　著者名　翻訳者名　出版社または文庫・シリーズ名　出版年　税込価格**

『理系のトップはなぜダメなのか』諒純也著 阪急コミュニケーションズ 2012年 1,620円

ブックガイド目次へ